

2022 年度 7 月オンライン研修・講習会のお知らせ

一般社団法人 日本音楽療法学会
研修・講習委員会

7 月オンライン研修・講習会は

7 月 11 日 (月) 正午～8 月 25 日 (木) 午後 11 時 59 分の約 1 ヶ月半視聴いただけます。

※動画の視聴申込は、**7 月 11 日 (月) 正午**よりマイページにて行ってください。

◆7 月オンライン研修・講習会の配信内容

【講演 1】

タイトル	音楽を医療に活かす ：失語症に対するメロディックイントネーションセラピー
講師名	東京都立産業技術大学院大学 認知症・神経心理学講座 特任教授 佐藤 正之 (サトウ マサユキ)
主な内容紹介	ほとんどのひとの言語優位半球は左側に存在する。それに対し、音楽の表出は右半球が司るとされる。左半球の脳損傷のために言語機能に障害をきたした失語症患者に対し、右半球が関与する音楽活動を用いた訓練が試みられてきた。その中で失語症の発話障害に対する有効性が確立しているのがメロディックイントネーションセラピー (MIT) である。MIT は 1970 年代に米国で開発された失語訓練法で、音楽のもつ拍やピッチという特性を用いて、発話の改善を図る。言語構造の異なる日本語については 1980 年代に関らによって MIT 日本語版 (MIT-J) として導入された。本講習では、言語の脳内機構と失語症の症候について解説した後に、MIT の手法と現時点での研究の状況について紹介する。
プロフィール	相愛大学音楽学部卒業後に大阪府立高校の音楽教諭を経て、三重大学医学部に入学。1994 年に卒業後は神経内科学講座に入局。東北大学医学部准教授、三重大学医学部准教授などを経て、令和 2 年 8 月から東京都立産業技術大学院大学認知症・神経心理学講座の特任教授に就任。医学博士、脳神経内科専門医、認知症専門医。認知症や、失語をはじめとする高次脳機能障害の診療を通して、ヒトの脳機能なかでも音楽の脳内認知機構を中心に研究するとともに、音楽療法のエビデンスの確立を目指して活動している。

【講演 2】

タイトル	音楽の本質と幸福の関係を考える —音楽療法が存在する意義—
講師名	日本音楽心理学音楽療法懇話会 会長 貫 行子 (ヌキ ミチコ)
主な内容紹介	音楽療法は今その本質を問われる時代となり、社会的認知拡大のためには、まず音楽の本質を見極め、音楽療法への適応可能性を説明できなければならない。 前半では音楽の起源、musicizing の快感、情動、自己達成感、時間芸術、生存に必要なコミュニケーション、美意識と脳科学。後半は人間の幸福とは、ポジティブ心理学、幸福を科学する (測定)、幸福感の身体的影響。最後に音楽と幸福の関係を考察する。
プロフィール	東京藝術大学音楽学部楽理科卒。同大芸術心理学研究室助手、筑波大学・金沢大学大学院・日本大学ほか講師。仁愛女子短期大学・上野学園大学客員教授を務めた。日本音楽心理学音楽療法懇話会会長。日本音楽療法学会認定音楽療法士。 著書に『バイオミュージックの不思議な力』、『新訂 高齢者の音楽療法』、『音楽療法 研究と論文のまとめ方』(星野・共著)。訳書に、J. Alvin 『音楽療法』(櫻林仁・共訳), R. Shuter 『音楽才能の心理学』以上音楽之友社。 世界音楽療法大会ほかで研究や論文の発表多数、講演や実践を行なう。 http://musicpsytherapy.gl.xrea.com/mnuki77/

【講演 3】

<p>メイン タイトル</p>	<p>音楽療法を支える「理論」とは —その捉え方と臨床への応用について—</p>
<p>講師名</p>	<p>小柳 玲子 (コヤナギ レイコ) : 司 会 (昭和音楽大学) 恩田 萌美 (オンダ モエミ) : 講義 1 (幼保連携型認定こども園 葛飾二葉幼稚園) 那須 貴之 (ナス タカユキ) : 講義 2 (医療法人 篤友会坂本病院・同志社女子大学) 木下 容子 (キノシタ ヨウコ) : 講義 3 (東邦音楽大学)</p>
<p>主な内容紹介</p>	<p>【講演趣旨】 学際的と言われる音楽療法には多様な理論がかかわっており、それらは常に発展と変化を続けています。理論というと堅苦しいイメージがあるかも知れませんが、本講座ではご自身の臨床に理論を活かしている音楽療法士 3 名に、それぞれが参照する理論と臨床への応用について解説いただきながら、理論を用いる意味を実践者目線で考えていきます。</p> <p>【講義 1】 恩田萌美 タイトル：感覚と運動の高次化理論における子ども理解の視点と音楽療法 『感覚と運動の高次化理論』は、宇佐川浩先生が、約 35 年間に渡って取り組んだ幼児に対する治療教育活動を整理し、一つの理論として構築したものです。「障害児の発達をどう読み取るか」という子ども理解の視点を丁寧に深めながら、係わりや活動を工夫し、柔軟に展開することが大切にされてきました。本理論の中で音楽療法は、発達臨床の一環として実践・研究が重ねられ、多彩な機能を持ち、幅広い対象児に有効なアプローチとして位置づけられてきました。今回の研修では、感覚と運動の高次化理論における子ども理解の視点について概説し、発達支援に音楽を活用することがどのような意味を持つと考えられてきたかを紹介します。</p> <p>【講義 2】 那須貴之 タイトル：調整的音楽療法の臨床 —マインドフルネスにも触れて— 演者は調整的音楽療法 (以下 RMT) を慢性疼痛集学的リハビリテーションの臨床において活用している。RMT は「気づきを高める瞑想」であり、「メンタルトレーニング」という色合いを持っている。このトレーニングという要素が、リハビリテーションへの導入時に、医療者からの理解を得やすいキーワードであった。さらにマインドフルネスとの関連性が示唆されていることも重要な要素であった。この講習会では、臨床における RMT の実践の紹介、さらにマインドフルネスとの関連性について簡単に紹介したい。</p>

	<p>【講義3】木下容子</p> <p>タイトル：対象を適切に理解し支援するための理論の応用</p> <p>－行動分析学の視点から－</p> <p>行動分析学は、人の行動を科学的に分析する学問です。音楽療法の対象者はもちろん、協働する音楽療法士や他職種、対象者の家族など、まわりの人々を理解し適切に関わっていくうえで非常に役立つ理論です。</p> <p>ここでは、行動分析学の中核となる考え方や行動分析の原理を分かりやすくお伝えします。そして、行動分析学の考え方を取り入れた音楽療法セッションの例を共有したいと思います。</p> <p>目の前の人の行動がどのような原因で起きているのか、なぜその行動が持続するのかなど「行動が生じる機能」を明らかにすることで、相手に対する見え方は面白いほど変わってきます。</p> <p>この内容が、皆さんの実践を新たな角度から検討する契機となれば幸いです。</p>
<p>プロフィール</p>	<p>◎小柳玲子：日本音楽療法学会認定音楽療法士。これまでに、精神科入院病棟、精神科デイサービス、放課後等デイサービス、発達支援センター、中途障害者地域活動センター等で音楽療法の臨床実践を行う。2019年地元横浜にコミュニティに向けた音楽スペース「おとむすび」を開設、地域での活動にも力を入れる。横浜国立大学大学院教育学研究科（障害児教育専攻）修了。昭和音楽大学非常勤講師。</p> <p>◎恩田萌美：東邦音楽大学音楽療法専攻を卒業後、淑徳大学大学院総合福祉研究科において宇佐川浩先生のもとで障害児の発達臨床を学ぶ。淑徳大学発達臨床研究センターにて、感覚と運動の高次化理論に基づく子ども支援の実践と研究を行い、現在に至る。現在は、幼保連携型認定こども園で、特別な支援を必要とする子どもと保護者の支援、保育教諭に対するコンサルテーションに従事する。資格：日本音楽療法学会認定音楽療法士、公認心理師、臨床発達心理士、保育士、児童発達支援管理責任者</p> <p>◎那須貴之：日々の業務：人生最終段階の医療・高次脳機能障害・慢性疼痛集学的リハビリテーションと介護予防等における音楽療法と心理療法。患者家族のカウンセリング。職員への心理カウンセリング、キャリアカウンセリング等の産業保健活動。認定音楽療法士、公認心理師、認定心理士、認知症ケア専門士他。武蔵野大学仏教文化研究所研究生、同志社女子大学非常勤講師。</p> <p>◎木下容子：洗足学園音楽大学音楽教育専攻卒。同大学附属音楽療法士資格取得準備講座修了。東京学芸大学大学院教育学研究科特別支援教育専攻（支援方法コース）修了。教育学修士。日本音楽療法学会認定音楽療法士。精神科病院、高齢者施設、グループホーム、就労継続支援事業所、放課後等デイサービスなどの現場で音楽療法を実践。現在、東邦音楽大学准教授。</p>

※講座内容についてのご質問は受け付けておりません。